



男は 痛い



國友万裕

第37回

『朝が来る』

1、黒子除去

「先生、黒子とったら？」と仲良しの先生に会食中に言われた。

俺は黒子のことは昔から気にはなっていた。俺の黒子は右の頬と顎に一つずつ。両方ともちょっと膨らんだような1センチ弱の黒子だ。

これは物心つく頃からある。おそらく小学校に入る頃にはもうあったような記憶がある。黒子が取れることは前から知っていた。うちの父方のおばさんたちはみんな美人で、美醜に気を使う人たちなので、取った経験があると聞いていた。それで、俺もとりたいという気持ちはあった。しかし、これもジェンダーに対する囚われで、男が黒子をとったりするのは男らしくないという気持ちがどこかにあった。

それに俺は学生生活が長かったせいで、黒子をとるお金もなかったのだ。

一度、行動に起こそうとしたことはあった。大学院の頃だ。20代後半の頃、意を決して、近くの外科の病院に行った。そこの先生は、「黒子とるんだったら皮膚科のほうに行った方がいいね」と近くの皮膚科を教えてくれた。しかし、そこの窓口で問い合わせてみると出てきた看護師さんは、「黒子って、手術？」とほかの看護師さんに訊き、「手術だったらやっていないんです」と答えた。どうやら、彼女たちの様子だとホクロをとりに来る人なんて滅多にいないのだろう。何もわかっていないみたいな、キョトンとした顔だった。仕方がない。あきらめた。

それから、20年くらい経ち、10年ちょっと前だ。行きつけだった鍼灸の先生が「黒子、お灸でも取れるかもしれないですよ」と自分から申し出てくれた。鍼灸だったら東洋医学だから、美容整形でとるよりもはるかに心理的抵抗は少ない。その先生のことは信頼もしている。やってもらおうかと思った。ところがその数日後、「國友さん、申し訳ないんだけど、國友さんの黒子、とるとクレー

ターになって、余計に不細工になる可能性があるんですよ」と言われてしまった。

やはり、とるべきじゃないのか。自然の流れから外れるようなことをするのは不幸になるという話を聞いたこともある。俺の黒子は、黒子占いでも悪い黒子ではないみたいだ。千昌夫もトレードマークの黒子を取った途端に借金まみれになったと聞いている。取らない方がいいのかもしれない。イケメンの人が黒子を取るのには様になるけど、俺みたいな醜男が黒子とったりすると、「あの人、大してイケメンでもないのに、黒子なんて気にしていたのねー」と悪口を言われる可能性もある。

ただ、髭が濃いので黒子に剃刀があたると、血がとまらなくなることがある。黒子は血の塊なので、切りどころが悪いと何時間も止まらなかったりするのだ。それに写真を撮った時に黒子が二つあるのはやはり不細工だ。あれこれ迷いながらも、俺は優柔不断な性格なので、いつまでも取らないままだった。

そこにコロナがやってきた。仕事がオンラインになって、しばらく誰とも会わない日々が続いた。もう俺の顔を忘れているだろうなあ、どさくさに紛れて、黒子を取ろうかという気持ちになった。ところが、美容整形のクリニックに電話してみると、「実は今コロナのため、京都の治療院は閉鎖中なんです」という返事。やはり取らない運命なんだろうと思った。

その後、最初にあげた友人と会って、話の弾みに黒子の除去のことが出たので、その場で調べてまた別のクリニックに電話した。すると、「今、黒子の除去は京都院ではやっていないんです。大阪のほうに行っていたらすぐにはできるんですけど」という返事。大阪まで行く気にはならない。「やはり、取らない運命なんだよ」と俺は彼に言った。

ところがその後である。彼と分かれた後、ふとした気まぐれでまた別のクリニックに電話した。3度目の正直とでもいうべきか。そこは明日にでも予約が取れるというのだ。

「でも、通院しなきゃいけないんですよね？」と訊くと、「いえ、1回だけで終わります」という返事。俺は早速予約した。もし行ってみて、カウンセリングを受けて気に食わない時は断ればいいとのことだった。

ホームページを見ると美容整形なんてやっている医者ってなんとなく胡散臭いという偏見が湧いてきて、とりあえず、当日ぼられないように、慎重に対応しなくてはと思い、クリニックへと出かけた。

黒子の除去は、1ミリあたり5000円くらいだと聞いていた。俺のは大きいからお金がかかるかなあ。クリニックに行ってみると、まず女性の人が黒子の大きさを測ってくれて、料金説明をしてくれた。両方とも7ミリで2つ除去すると合計金額が7万円だという。思い切ってやってみようか。今年は旅行もしていないし、1回旅行したと思えば7万くらいは！ そう思った俺は、「じゃあ、お金下ろしてきますから、やってください」とOKした。

お金を払い込んだ後、出てきた先生は若い男の先生。清潔感もあるし、腹黒そうなタイプではない。看護師さんに「30分くらいですか」と訊くと「いえ、そんなかかりません」と言われた。実際、その通りで、手術が始まるとちょっとだけ麻酔をするのだが、ほんの5分くらいで二つのホクロは取れてしまった。なんと、素っ気ない。50年も俺の顔にこびりついてきた黒子はその時のひらめきであつという間に俺の人生から消えていったのだ。

俺は思い切って黒子をとった顔をインスタグラムにあげた。Facebookは友達がたくさんいるので出すのが恥ずかしい。インスタはかつての教え子など若い人たちとしか繋がっていないため、いいかと思った。「黒子をとりました！」と書いた。すると意外に好評で、普段は反応してくれない子まで「いいね！」やコメントをしてくれた。

若い人たちは、黒子をとるぐらいのことはなんとも思わないのだろう。むしろ、顔がキレイになっていいとポジティブに評価してくれている。考

えてみると、最初に外科に黒子除去の相談に行ってから 30 年が流れている。あつという間の 30 年間だった。俺はその間ずっと独身で、子供もなく、学生のような生活をしてきたので、時間の流れを忘れていたのだが、気づかないうちに確実に社会は進化していたのだ。今となっては男性も黒子を取りましょうみたいな広告もしばしば見かける。これはおそらく消費社会に踊らされている面もあるのだろうけど、男が外見を気にしても構わなくなったことは歓迎すべき進歩なのだった。

2. これからは綺麗になろう！

その後、心なしか心が軽くなった。あれは悪い黒子で、除去したことで運勢が良くなったのかもしれない。それから新しいことをどんどん躊躇せずに始めようと思うようになった。次は脱毛をやってみよう。俺は毛深いのが昔からコンプレックスで、でも昔は男が脱毛なんて！と言われていたから大っぴらにはできなかった。俺は長年プールに通ってきたのだが、「胸毛がええなあー」とじろじろ見られることがあるため、それが嫌だった。胸毛が気になるというよりも、そのことでいじられるのが嫌だったのだ。脱毛クリームなどをこっそり買って、自分で処理していた。

しかし、今は男だってきれいになっていいのだ。そういえば去年だったか、髭を永久脱毛したいとおおっぴらに言っている男子学生がいた。胸毛や腹毛は日本人は生えていない人が多いから、気にする人も昔から一部にはいたと思う。しかし、髭は誰でも生えているし、ツルツルにしたいという人は少なかった。

ところが最近になって、髭の脱毛をしている若い男性は多いことがだんだんとわかってきた。サイトを見ても「モテる男は髭がない」みたいな広告がたくさん出ている。広告だから煽っているという面もあるのだろうが、確かに毎日髭を剃るのは面倒くさいし、ツルツルした肌の方が綺麗だ。

実は最近になって、ボクシングの練習も始めた。コロナ太りで体がブヨブヨなので、何か新しいことを始めたいと知り合いのジムに通い始めたのだった。1 年後には体を絞って、若いボクサーたちと並んで上半身裸の写真を撮りたいと思っている笑。そうなった時に毛があるのは不細工である。

そうだ！ 男だって脱毛してもいいのだ！！！！

黒子をとって、脱毛して、綺麗になって、裸が似合う男になる。それは若い頃から憧れだったけど、若い頃はそれを追及できなかった。アラ還になった今それを追求して、終わりの人生は自分の理想の体で過ごすというのはどうだろうか。

そんなことを考えているとなんとなく歳をとることも楽しくなってきた。

3. バケツリスト

Bucket List という言葉がある。死ぬまでにしたいことのリストだ。以前、ジャック・ニコルソンとモーガン・フリーマンの主演で『最高の人生の見つけ方』という映画があったが、この映画の原題が Bucket List である。もう余命が長くない男たちが死ぬ前にしたいことをしようとする話である。

アマゾンで調べていたら、なんと「死ぬまでにしたい 100 のこと」というノートも出ている。俺も、そういうリストを作らなきゃいけない年齢に差し掛かっている。これまでも書いてきたが、俺の人生の中で「死」が現実味を帯びてきている。徐々に親戚やお世話になった先生が亡くなっているのだ。俺はもうすぐ 57 歳だ。還暦まで 3 年。若い頃は還暦と言ったら、相当のおじいさんだと思っていた。ところが意外にそうではないのだ。自分の抱いていた 60 歳のイメージには全くそぐわないまま歳だけ取ってしまった。この頃は寿命が伸びているので、昔の 60 と今の 60 では大きく違っているが、それにしてももうシニアの年齢であり、後 3 年経てば、映画も常時シニア料金で見られるようになる。

別に永久に生きていたいわけではない。だけど、

死ぬというのは怖い。人間だったら 100%死ぬのだけど、死は誰も経験したことのない世界だ。死後の世界について書かれた本はたくさんあるが、どこまで本当なのか、眉唾である。生き返りを信じる人もいるが、転生するというのもそれはそれで怖い。今の自分が無になることに変わりはないからだ。

死んだ後には新しい世界が広がると信じたいところなのだ。無にはなりたくないのだった。しかし、現実はどういう世界に行くことになるのかは誰にもわからない。そう考えていると不安はどんどん募っていくのだった。

とりあえず、生きている間は自由にしたいことをして、自分の気持ちを紛らわすしかない。問題なのは、100 もしたいことがあるのか？ ということである。まず、ボクシングができるようになって、しまった身体になりたい。そして脱毛して、若い男性たちと並んで、上半身裸の写真を撮る、これが1つ目である。スポーツ音痴だった俺は、何よりもスポーツマン的外観に憧れるのだ。

次にしたいことは、キリスト教を学び、最終的にはクリスチャンになることだ。思えば、キリスト教を勉強し始めたのも、死への恐怖がきっかけだった。アメリカ人は天国や死後の世界を信じている人が多いので、あやかりたいと思ったのだった。また俺は故郷に遺恨を抱いているため、家族の墓には入りたくない、だけど、感情的な理由で親や兄弟とは別の墓に入るのは親不孝だ。バチが当たるかもしれない。日本人でクリスチャンの人は自分で墓地を作ることもあるらしい。ずっとアメリカが好きだった俺にはキリスト教系の墓はピッタリだし、これから先、生粋のクリスチャンとして信仰を深めることができれば、家族とは違った墓に入ることも許されるのではないか。これがリストの2つ目である。

映画に出たいという気持ちもある。最近になって映画関連の仕事をしている人と知り合ったので、小さい映画だったらそのうち出してくれるかもしれない。しかも自分のイメージを崩したいから、

それこそ、おじいさんボクサー役とか男っぼい役をやってみたい。これが3つ目だ。

死ぬまでに一つくらい楽器がこなせる人間になりたい。ピアノがいい。以前ギターに挑戦したことがあったが上手くならなかった。俺は学校時代、スポーツは苦手だったけど、音楽は得意だった。意外にスムーズにできるようになるかもしれない。これが4つ目。

仕事が定年になって、時間のゆとりができれば、もう一度大学院に入って、博士号を目指したい。今は大学院まで行く人は大抵は博士号を所得する。俺たちの頃は博士課程まで行っても、博士号はもらえなかったのが、今となっては、博士号がなかったら就職ができない。だから若い人は持っているのだ。俺も冥途の土産に博士号をとりたい。そして、棺の中に博士号を入れて眠りたい。俺の人生は勉強の人生だったのだから。これが5つ目。

他には特別何もない。それほど思い浮かばない。

6つ目に思うことは、とりあえず、日々をひたすら生きて、定年まで仕事をまっとうしたいということ。7つ目には、毎日、きちっと掃除をして、食べ物にも気を使い、凜とした生活を死ぬまで送りたいということ。

そして何よりも、死ぬまでにこれまでのトラウマをすべて解消し、俺を傷つけてきた人全てを許せる人間になり、最終的には死を受け入れられる人間になって、俺の人生の物語を完結させないと思うのだった。これが8つ目のそして一番大きな目標である。

100 のリストを完成させるにはあと 92 だなあ。小さなしたいことだったら日々生まれてくるだろう。あのレストランで食べたい、あの演劇を見たい、あそこに旅行に行ってみたい、あの本を読みたい。しかし、そうそう大きなことは今生生まれに違いなかった。もうこの年になると夢も見ることができなくなってしまっている。

この頃時間すら持て余してしまうのだ。昔だったら、自転車走らせ、市民センターで本を読ん

だり、公園を徘徊したりしていたのだが、今はそれすらもしんどくてできない。60代くらいになると体がさらに老朽化してくるだろう。60代くらいまでは大丈夫な人が多いが、70になるとどんと体が落ち込むという話も聞いたことがあった。

4. 複雑な背景のお坊ちゃん

この頃、昔の日本映画がどんどんソフト化されていて、Amazon プライムなどで配信されたりもしている。で、この頃、凝っているのが石原裕次郎の映画だ。『陽の当たる坂道』『あいつと私』『乳母車』を続けてみた。いずれも石坂洋次郎の原作である。

俺は中学の頃、石坂文学が好きだった。俺が理想とする男性像が描かれているからだった。複雑な背景をもったお坊ちゃん。それが石坂文学に登場する男性像だ。ちょっとひねっているけど、罪がなくて、意地悪じゃない。

中学1年の頃、石坂洋次郎の文庫本を読みながら寝床に入ったものだ。とりわけ好きだったのは『寒い朝』である。これは高校生の話なので、歳が近かったせいで興奮したのだろう。

俺と彼が違っているのは、俺はスポーツ音痴だということ。それと男の子集団の中に入れない子だったことも違っている。

俺はあの当時から人生のどん底へハマっていこうとしていた。学校では、女子たちから「気持ちが悪い」と言われ続け、接触するとティッシュで黴菌のようにふかれ、同一化する男の子も見つからず、体育の先生からの暴言、周りの無理解、学校では誰とも話さない。

『寒い朝』を何度も読んで、主人公の男の子と同一化し、夢の中に浸るのが、あの当時の俺の楽しみだった。思えば、あの時に私立の学校に行っていたら、スポーツを始めていたら、切磋琢磨しあえる友人が見つかったら、俺はそのまま石坂文学の主人公のような男の子になって、普通に平凡な幸せを手にすることができたのかもしれないか

った。しかし、俺はあの時にそういう生き方は選べなかった。俺のせいではない。他の誰かのせいでもない。運命がそういう状況を与えてくれなかったのだ。

俺だって、複雑な背景を持ったお坊ちゃんだ。お金で困ったことは一度もない。必要なものは必ず、買ってくれる家だったのだから、石坂文学の主人公たちと近いのだ。俺はやはり自分をちょっとスライドさせたような人に憧れる。この人だったら、なりたい、そしてある面、なれそう。そういう人が理想の男性なのだ。

五十歩百歩でなれそうな人物になれなかったこと。それが俺を今でも苦しめる後悔だった。絶対になれないような人物ではなく、もうちょっとでなれそうだったのに、そうならなかった。

そして、運命の悪戯で俺の人生は不登校へと向かい、その後それを十字架として背負わなくてはならなくなったのだった。

5. 『朝が来る』(河瀬直美監督・2020)

河瀬直美の映画は海外での評価は高いものの俺はこれまであまりいいとは思わなかった。ドキュメンタリーのような作りでドラマ性が希薄なので、うんざりしてしまうことの方が多かったのだ。顔のアップを延々と撮ったり、台詞のない場面が続いたり。日本の風物がたっぷり描かれるから、外国では評価が高いけど、これが日本だと思われたら困ると思っていた。

しかし、今回はよくできている。中学生で妊娠してしまい、気がついたときにはもう中絶もできなくなってしまっていた女の子が、生まれた子供を里親に出すという話である。

もらってくれる方の夫婦は、男性の方が精子が少なくて子供ができないため、斡旋してくれる N P O みたいなところに相談に行くのだった。この N P O 的な団体の様子が極めて興味深い。里親になる条件として、妻が仕事をしないで家庭に入ることが挙げられる。これは何故なのか。実の子で

はないから、うまくいかない可能性もあるから、それで仕事を言い訳にしてネグレクトされるのは困るということなのだろうか。

子供を里親に出す方の女の子たちが一緒に暮らす、海の島みたいなところの様子も興味深い。実際にこういうところは存在しているのか。

里親に出す時点では彼女は優しいいい女の子なのだが、次第に荒んでいく。

中学の時に子供を出産するなんて重過ぎる十字架である。それを背負うしかなかった彼女はその後も社会の片隅を生きるしかない。俺は彼女の姿に自分を重ね合わせた。俺が普通に学校生活を送っていたら、俺は医者になってなれたかも知れない。エリート大企業に就職できたかも知れない。しかし、運命がそれを許さなかったのだった。

人間の人生って、つくづく、そんなたくさんのが起きるわけではない。むしろ三つ子の魂百までのことが多いはずだ。

俺の人生はまさにそうだ。

15の時に心が壊れて、その後は壊れた心を修理するために費やすような人生だ。結局、俺の人生に神様が用意してくれていたことは、映画、文学、ジェンダー、スポーツ問題、女性との確執、故郷への憎しみ、といったところだ。

この中で映画や文学は今となつては、それを研究するのが仕事となつてしまった。

スポーツは、そのコンプレックスのおかげで水泳やボクシングを始めることになった。水泳は昔は何キロも泳げたものだ。

故郷は、休み中の里帰りを別とすれば、帰るのは墓に入る時だ。

ジェンダーに関しては、全く理解してくれない人があまりにも多いので、それが辛いところだけれど、でも、それが執筆のモチベーションになっている。

やはり残された課題で最も大きいのは女性との確執だろう。

『月の輝く夜に』という映画で、夫の浮気に泣かされている妻が、別の男に次のように尋ねる。「男

はなぜ、複数の女を追うの？」それに対して、彼は「さあ、死が怖いからかも」この答えを聞いて彼女は「答えてくれてありがとう」と満足。彼女のふに落ちる答えはこれだったのだろう。

俺は女の人たちに問いかけたい。「なぜ、女は男を『気持ち悪い』と言ったりするの？」笑。誰かふに落ちる答えを与えてください！！